

# ハ行音の前の促音

## — P 音の発生 —

濱田 敦

促音は、他の機会でも述べた様に、撥音及び狭義の長音と共に一系列をなして国語の音韻体系中に存在する。広義の長音音韻の一と認むべきものである。而してこの長音音韻は、一般にそれが現れるのに或る特殊な条件を必要とするのが原則であつて、促音の場合も、一音韻論的語の内部で、母音音韻の後、而も外来語など特殊な例外を除いて、普通五十音図のカ、サ、タ、バ行音、即ち子音 [k, s, t, p, m, n] にはじまる音節の前にか立ち得ないのである。この後続音節に関する条件は、撥音及び狭義の長音の場合それ／＼内容を異にするものであるが、又現代語と古代語とでも同じでなく、常に厳密に例外なしと云ふわけではないけれども、大体の傾向程度のもが見られることは旧稿にも指摘して置いた通りである。<sup>(1)</sup>

例へばその分化が、かなりはつきり認められるものとして、「強調」の機能を担つてみると考へられる長音がある。即ち、大體に於いて副詞、或は形容詞(の副詞形)とよばれる語の種類に多く現れるものであるが、その意味を強調する為に、主としては

その第一音節の次に長音を挿入することが屢々行はれる。そして、その際挿入される音節の後続音如何によつて、促音、撥音及び狭義の長音の三つの分化が見られるのである。即ち後続音節が、カ、サ、タ(バ)行の所謂清音である場合には、キット(必)サツキ(先)マツシロ(稟白)の様に促音が挿入される。ナ、マ行音の如き鼻子音ではじまる音節の場合には、ミンナ(皆)、アンマリ(余)の様に撥音が挿入される。そして、広義の母音音韻ア、ヤ、ワ行音の場合及び後続音ゼロ即ち語尾の場合にはイーエ(吾)セー(為よ)の様に、狭義の長音が現れることが多いと思ふ。勿論それ／＼の場合、一つの例外なしに原則通り行はれてみると云ふわけではないが、それ等の実例及び理由の一端については、旧稿にも述べたのでここでは省略して置く。

ところで問題は、濁音即ち五十音図のガ、ザ、ダ、バ行音とハ行音及びラ行音が後続音節である場合についてであるが、濁音は、古代語の場合、その前に存したと考へられる鼻音的入りわたりの為に、<sup>(2)</sup>ナ、マ行音と同じく撥音の挿入される部類に属し、そ

の固定した形が、既に鼻音的入りわたりを失つてしまつた現代語にも引つがれてゐるものが少なくなく、一方現代語濁音の音声的性質から見ればむしろその方が自然である所の、長音形のもの（例へばマダーマダー(米)）と入りまじつて、甚だしい混沌状態を呈してゐる。又ハ行音については、かつては「*urni*」(出来)の如き形があつて、その前に促音の立ち得たものもあつたらしく、現代語でも所謂巻き舌として、例へばエライ(偉い)を強調して「*erai*」或は「*erai*」の様に発音することもないではないが、一般にはむしろ母音音節の場合と同じく、長音の側に立つべきものと考へられる（例へばマールイ(円)）。

さて最後に残つたハ行音に関しては、問題が錯雜してゐて、簡単には解きほぐし難い。即ち一方に於いてハ行子音が古来両唇破裂音から、その摩擦音を経て、喉頭的なものへと云ふ三段階もの変遷をたどつて現代語に至つて居り、従つて音声学的には説明の出来ない *h*、*h*、*h* と云ふ対応関係が、音韻力学的には成立してゐることがその主な理由となつてゐる。例へばヨホド、ヤハリ、モハラ、アハレなどに対して、強調形としてヨッポド、ヤツパリ、モツバラ、アツパレの如き促音の挿入された形が作られ、ハ行音はバ行音と交替する。殊に前二者の場合現代語にもヨホド・ヨッポド、ヤハリ・ヤツパリが対立的に並存してゐるのである。(註)

現代語では少なくとも、ハ行音自身の前に促音と云はず、一般に広義の長音の立つた形などと云ふものは殆んど考へられない。

それは、この様な状態やその程度を表はす様な語の種類は、多くやまとことばであり、従つて語頭を除いて、もとハ行音であつたものは凡てア、ワ行音化してゐるのが原則である為で、若し語中・尾にハ行音が現れる音があるとすれば、それは漢字と云ふ特殊な文字の抵抗の故に、ア、ワ行音化を免れた、漢語の熟語以外にはあり得ないであらう。例へば「是非」<sup>ゼヒ</sup>と云ふ語が強調されて「*Negei*」の様に発音される場合があるとすれば、ゼヒと云ふハ行音の前の促音が認められるであらう。又明治以後多く採り入れられた欧米諸言語からの外来語、殊にドイツ語からのものには、例へばバッハ(Bach)の様に、やはりその様な促音が、極めて特殊なものとして現れる。

上にあげたモツバラ、アツパレなどの様な、やまとことばであり乍らハ行音の前に促音の挿入されたもの、而も現代語では、そのハ行音はバ行音として伝へられてゐる例は、極めて例外的なものであり、これ等は、恐らくは語末尾のハ行音がまだア、ワ行音化しなかつた時代、即ち略々平安朝中期以前から、既に促音の挿入された強調形が非強調形と対立的に存在し、そのままの形で固定して現代語まで伝へられたものと考へざるを得ないのであるが、この場合音声学的に見れば不合理である筈の、ハ行音とバ行音との対立が何故成立したかと云ふことを通時論的に解明して見たいと云ふのが、本稿の主な目的の一つなのである。

促音音韻の本質は、有坂博士に從へば、「発音運動の突然の停止」であると云はれる。(註)

若しこの様な音韻観によるとすれば、促音に後続する音節は、無声破裂音乃至破裂音を子音とするカ、タ、バ行音〔p, t, k, b, tɕ〕が最も理想的なものと云ふことが出来るであらう。即ちこれ等の子音の準備状態は正に「発音運動の突然の停止」と云ふ理想にふさはしいものであるからで、ついではこれ等の有声音を子音とするガ、ダ、バ行音〔g(d), d, b, dʒ, b〕がこれに叶ひ、更に摩擦音サ、ザ、ハ行音〔s, z, ʃ, h, ɕ, ɕ〕流音〔l, r〕半母音〔y, w〕行音〔j, j〕母音音節(ア行音)の順で、促音の後続音節たる資格から漸次遠ざかつて行く筈である。そこで、この無声破裂音を子音とするカ、タ、バ三行音の場合には正にこの條件に最もよく叶ふものと云へるけれども、唯摩擦音を子音とするサ行音が、その資格に些か欠けるものであるに拘らず、現代語に於いて、促音の後続音節の一たる位置ををかしてゐることが注意される。尤もこれは、考へ方によつては、古代語に於いてサ行子音が、現代語の様に、単なる摩擦音でなく、〔s, z〕の如き破裂音であつた、その惰性であるのかも知れないけれども、サ行子音の問題はまだ明らかでない点が多いのではつきりしたことは云へない。

云ふことは、何と云つても音韻論の原則から云つて不自然であることを免れないものであるから、このずれ、不和を何とかしてなくしようとするはたつきが、古くから現れてゐる。即ちサ行音を破裂音〔tɕ, tɕ〕の形で実現することがこれで、その様な例として、オトツツァン(お父様) チツチャイ(小さい) ショツチュー(始終) トバツチリ(飛ばしり) デツチリ(出尻) マツツグ(真直) マツチロ(真白) オツチヌ(おつ死ぬ) ワツチ(俺) ニツチモサツチモ(二進も三進も) ゴツツォー(御馳走) などがあり、この外、デツチ(弟子) ボツチャン(坊様) ボツチ(ヒトリ) サンダラー(法師) アゼチ(按察使) ラツチ(藕次) サイカチ(皂角子) などの語も或はこれに加へられるかも知れないことを旧稿で指摘して置いた。これ等の例の中には、現代語で既に死語となつてゐるもの、或は方言的にのみ行はれてゐるものなど雑多なものが入りまじつてゐるけれども、いづれも、促音と摩擦音との間の不和をとりなさうとして成立した形である点に於いては異なるところがないと見てよいであらう。

この傾向が将来も益々度を加へて、遂には促音の後にサ行音が立ち得なくなる日がやつて来るか、或はそれとも、これ等が単なる線香花火的なレジスタンスに止るものであるかは、今のところ軽々には逆睹し難いけれども、このサ行音と並んで、摩擦音を頭子音とする音韻の系列の、他の一端を担ふところの、ハ行音の場合には、正に前者の道、即ち、摩擦音の前に立つた促音の為に、おしなべて破裂音化するとも云ふ現象がもたらされ、而もその破裂音は、それまでの国語音韻体系の中には存在しなかつたので、

正にその理由によつて新しく発生したと云ふ、極めて注目すべき過程を惹起したのである。

ハ行子音の変遷については、既に上田万年博士の有名な「P音考」以来論議が交はされたが、新村、橋本兩博士のすぐれた考証によつて、その過程は略と明らかとなつてゐる。即ち、有史以前のことはさて置き、上代奈良朝前から降つて中世末期桃山時代頃までの、京都を中心とした畿内方言では、両唇摩擦音的な f〔*f*〕であり、江戸時代初期前後から、現代語の様な喉頭摩擦音 h〔*h*〕に移行して行つたものと考へられるのである。一方、促音音韻の発生は、中世末期頃まで多少の動揺をうけてはゐたにしても、平安朝初期頃までは溯れさうであることについては旧稿にも述べたところである。しかりとすれば、その促音の発生当初たる平安朝初期から、語中、尾のハ行音がワ(ア)行音化する中期頃までの間に於いて、例へば前掲の「もはら」「あはれ」などの語に強調の目的を以て、促音が挿入されることがあつたとすれば、それは当然「*mofarah*」〔*mofare*〕の様な形で実現されたと考へざるを得ないであらう。旧稿にあげた「云ふは」の如き連語も、恐らくは「*ifufah*」から「*ifufah*」を経て、中間の母音 u を脱落して「*ifufah*」と云ふ促音形となつたのではないかと想像される。ところでこの、仮に「*ifufah*」で表はした当時のハ行子音は、両唇的摩擦音であつて、上述のサ行音と同じく、促音の後続者たるには、些かその資格に欠けるところのあるものである。しかし、現代語に於いて、やはり摩擦音を子音とするサ行音の前に促音の立

つ事が許されてゐるからには、この様なハ行音の前の促音(音学的には「*ifufah*」の如き重子音)の存在は、これを実証することは困難であるけれども、上に述べた様な種々の事情(ハ行子音の音価、促音発生の時期)を考慮に入れるならば、当然認められるべきものと思ふ。而も、語によつては、促音形が固定して、一方非促音形が語中、尾のハ行音をワ(ア)行音化したに拘らず、もとのハ行音のままの形を保つたものが、このアツパレ、モツバラ或はイツパなどの語であつたのである。

但し「もとのまま」とは云つたけれども、実は、現代語ではハ行音ではなくて、バ行音の形で伝へられてゐるのである。この様なバ行音を如何にして説明すべきであらうか。私の考へるところでは、正に上述のサ行音の場合と並行して、「*ifufah*」〔*ifufah*〕||〔*ifufah*〕と云ふ比例式が成立すると思ふ。つまり、この破裂者〔*ifufah*〕は、その前に挿入された促音を完全な形で実現すること、即ち呼吸の停止を確実に行ふ爲に、摩擦音〔*ifufah*〕から無意識的に変化したものであつて、かつて有史以前にさうであつたと云はれる、古いハ行子音の復活乃至名残りでは決してなかつたのである。この〔*ifufah*〕の現象も、恐らくは、はじめ、現代語の促音にづくサ行子音の破裂音化と同じく、語によつて散発的に見られるに過ぎないものであつたと私は想像する。しかるにこの場合は、サ行音の場合と異り、当時の音韻体系に於いて音韻〔*ifufah*〕なるものが存在してゐなかつたのである。つまり音韻体系の中に *ifufah* ( *ifufah* ) : *ifufah* と云ふ空位があつたわけであるが、この様な場合、音韻論の原則から云つて、当然この空位を埋めようとする

るはたらきが、何等かの機会に、起るべきことが予想される。正にこの様な準備状態にあつたところへ、「*し*」の前に促音が置かれると云ふ事情の生じたことは、音韻 (P) の発生にとつて全くうつつけの好條件と云はねばならないものであつた。なほこの様な條件は、漢字音の舌内入声の文字が、ハ行者ではじまる文字の上に立つて熟語を形成する場合も、同様に生じた。そこで「*い*」杯「*実否*」などと云ふ形が生まれたわけである。

新しい音韻 (P) はこの様にして発生し、そしてその為、この様な位置におかれた「*し*」はおしなべて (P) となつてしまつたのであつて、これが、促音につゞくサ行音が極めて稀にしか破擦音化しないものと異なる所以だつたのである。

「おしなべて」とは云つたけれども、実は、中には中世末期頃までも「*し*」の形を保ちつづけた語もあつたらしい。それは旧稿にも指摘した「日本」であつて、比較的音価のはつきり知られるキリシタンのローマ字資料及び朝鮮の諺文文献に、次の様な例が見えてゐる。

Nifon gachi va Xirann (コリヤード日本文典、七頁、大塚氏訳一〇頁)

Netton (セイリス、日本航海記、大塚氏繙刻本一頁) (10)

にほん *し* 咩 (捷解新語九ノ一八オ、二〇ウ、二一ウ)

なほこの「日本」と云ふ語は一方に於いて

Nifon (天草本平家、扉、日葡辞書)

Nippon (天草本平家、序、日葡辞書)

にほん *し* 咩 (捷解新語一ノ九ウ、九ノ四オ)

の様な例も見えて居り、[nifon] [nihon] [nippon] の三形が、中世末期頃には、並び行はれてゐたらしいのである。<sup>(11)</sup>そして第一の Nifon の形こそ、むしろ平安朝以前の古い伝統をつたへてゐるものと云へるであらう。因みに、諺文の *し* 咩は、考へ方によつては、むしろ [nippon] を表はしてゐるものとも云へさうであるが、*aspinate* II は、この様な朝鮮の諺文資料では、国語の軽唇音「*し*」を表はす為<sup>(12)</sup>に用ゐられて居り、若し [nippon] ならば、当然 *し* 咩と書かれた筈である。<sup>(13)</sup>このハ行音の前の促音の脱落した形 (促音の脱落する理由はいろいろあるであらうが、要するに国語の広義の長音と云ふものが極めて不安定な音韻であると云ふことが根本原因となつて居り、従つて促音のみならず、撥音、狭義の長音いづれも屢々脱落するのである) が即ち *nifon* であり、これと同類の語は必ずしも稀ではない。旧稿にあげた *Naiti* (雑筆) もその一であり、日葡辞書によれば、当時やはりこれと並んで *Naitit* の形も行はれてゐたが、前者の方が好ましい云ひ方であると註してゐる。日葡辞書が「好ましい」と註してゐる様な形は、一般により古い、もしくは文語的な云ひ方である場合が多く、従つて当時の口語ではむしろより「好ましくない」筈である *Naitit* の形の方が普通に行はれてゐたと考へて、一往差支へないであらう。なほ *Naiti* の背後には、更に促音形 *Naitit* の存在してゐたことが想像されると思ふ。

以上述べたことを要するに、古来「はひふへほ」の仮名で表はされて来た音韻は、略々平安朝初期前後から、鎌倉時代初期頃ま

でかけては、(a) :: (b) の二個が対立的に存在し、その中 (a) のものは、促音音韻の発生と共に、そのあとに立つ場合には、時に (a) 、時に (b) の形で実現されることがあつた。その結果として、国語音韻体系の中に、新に音韻 (b) が加はるに至り、

(a) :: (a) :: (b) の対立が成立する。而して、語頭及び母音音韻の後続音としては、(a) 、撥音音韻の後続音としては (b) 、そして促音音韻の後続音としては (p) と云ふ分化が次第に固定する様になるが、時にその間に混乱が無きにもあらずであつた。つまり、音韻論以外の多くの他の理由によつてこの分化関係がかき乱され、撥音のあとにも (a) が、又促音のあとにも (a) が時に現れることがあつたのである。この状態が中世末期頃までつゞき、江戸時代初期前後に音韻 (a) は (a) に変化して現代語の如き (p) :: (a) :: (b) の関係が成立する。この三者の関係は、音声学的には (p) と (b) とは無声有声の関係で対立し、これに対して (a) は全く無縁のものであるが、音韻力学的には (a) に対して一方では (b) 、他方では (b) が交替し、(a) と (b) との間に直接の対応は本来見られない筈のものである。

註(一) 広義の長音に関する拙稿には左の如きものがある。

「促音沿革考」(国語国文一四ノ一〇) 「促音と撥音」(人文研究一ノ一、二) 「長音」(人文研究二ノ五、六)。

(二) この様な古代語の濁子音については拙稿「撥音と濁音との相関性の問題」(国語国文二一ノ三) 参照。

(三) この「出来」の語は、キリシタン史料には一般に *cuttin* と表記されてゐる(天草本平家物語、日葡辞書)。江戸時代

以後は「*cuttin*」となつて現代語に及んでゐるものである。

(四) 但しこの二語は比較的新しい語の様で、古くも室町時代初期以上には溯れぬものらしい。若ししかりとすれば、非促音形のヨホド、ヤハリの方がむしろ促音形のものにもとづいて、あとから作られたと考へるべきかも知れない。この場合語中にハ行音の残存(乃至復活)したのは、やはり「余程」「矢張」と云ふ漢字のおかげであらう。

(五) 同博士「音韻論」九四頁 註(七)。

(六) 古代語に於けるサ行子音については有坂博士の論考

「上代に於けるサ行の頭音」(国語音韻史の研究所収) があるが、そこで博士は、上代に於けるサ行音の中、サの頭音はアフリカタ [a] 或は [a] であつたのに対し、シの方は摩擦音 [s] 或は [ʃ] であつたらうと結論して居られる。その他の音節については資料の不足の為に明らかでない。

(七) 新村博士「波行輕唇音沿革考」(国語に於けるF H 両音の過渡期)(東亞語源志所収) 橋本博士「波行子音の変遷について」(国語音韻の研究所収)。有坂博士「江戸時代中頃に於けるハの頭音について」(国語音韻史の研究所収)。

(八) 厳密に云へば [a] :: [a] :: [a] に対しては (a) :: (a) であつて、ハ行音の場合も、もとはむしろ破擦音 [a] の形で実現されたと考へるべきかも知れない。

(九) 撥音につゞく場合には原則として「三杯」の様に、ハ行音となる筈であるが、「安否」の如く、意味の切れ目が上下の文字の間にある場合にはアンビの様にバ行音となつたも

が多い。これは類推してか、「文武」の如き本来バ行音の文字であつたもので、ナンブと發音された。江戸時代以後は、更に一般の熟語に於いても撥音につづく場合バ行音化したものが少くない（関白、カニシロ凡夫、ボウフ田夫、タウ元服、ゲンボク軍兵、イクサウ等）。これ等の語については、まだ多くの問題が残されてゐるが、本稿では触れなす。

(10) John Saris, *The first Voyage of the English to Japan (1611—1613) Transcribed and collated by Takaharu Otsuka, The Toyo Bunko Publications Series D, Vol. III.*

(11) この「日本」の語については、吉田澄夫氏「室町時代以降における国号呼称」（橋本博士還暦記念國語學論集所収）がある。国字文献には、例へば易林本、餽頭屋本節用集「日本」、落葉集「日本」の様に見える。

(12) 拙稿「弘治五年朝鮮板「伊路波」諺文对音攷参照」。

（昭和二九、一、一二稿）

——大阪市立大学助教授——